

めいらず  
不馬入遺跡

# 例 言

1. 本書は愛知県額田郡幸田町大字須美字不馬入に所在する、不馬入(めいらず)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省による国道23号岡崎バイパス建設工事・愛知県土木部道路建設課による国道23号拡幅工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じた委託を受け、平成3年4月から6月にかけて行った。調査面積はそれぞれ300㎡・100㎡である。
3. 現地調査は、地元住民の方々の参加を得て、本センター調査課主査大橋正明、同調査研究員野本欽也、同松田 訓が担当した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関の御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所、愛知県土木部、幸田町教育委員会
5. 本書の編集は、松田 訓が担当した。執筆分担は次のとおりである。  
I～II-1・III～VI 松田 訓  
II-2 大橋正明  
なお、遺構、遺物の撮影は松田 訓が行った。
6. 遺物整理作業については次の方々の協力を得た。  
柵木えみ子、藪田久子、山本章子、西山朋子
7. 本書に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。また、本書に示す海拔表記は、東京湾標準 (T. P.) の数値である。
8. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
9. 調査記録、出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
10. 本書の執筆にあたり次の諸機関、諸氏に御指導・御助言をいただいた。記して感謝したい。(敬称略)  
井上喜久男、内野 正、大橋康二、鈴田由紀夫、立松 宏、中井さやか、中村徹也、檜崎彰一、西岡義貴、藤澤良祐

# 目次

## 第I章 調査の経緯

- 1 調査に至る経過..... 1
- 2 調査の経過..... 1

## 第II章 遺跡の立地と環境

- 1 遺跡の位置..... 2
- 2 歴史的環境..... 4

## 第III章 調査の概要

- 1 調査区..... 7
- 2 調査の方法..... 7

## 第IV章 遺構

- 1 基本層序..... 8
- 2 遺構..... 9

## 第V章 遺物 .....14

## 第VI章 まとめ .....16

## 付表 .....17

## 挿図目次

第1図	愛知県位置図	2
第2図	幸田町位置図	2
第3図	額田郡周辺地形図	3
第4図	蘇美天神社遠景	4
第5図	牛の松遺跡A地区	4
第6図	周辺遺跡位置図	5
第7図	不馬入遺跡と街道位置図	6
第8図	調査区位置図	7
第9図	調査区東壁断面図	8
第10図	調査区遺構位置図	9
第11図	土坑列付近平面図	10
第12図	SX 10 断・平・側面図 SE 01 平面図	13
第13図	出土遺物実測図	15

## 図版目次

図版1の①	遠景（東より）
図版1の②	近景（東より）
図版1の③	全景（南西より）
図版2の①	調査区中央検出状況 （南西より）
図版2の②	同完掘状況（南西より）
図版2の③	SK 10（南東より）
図版3の①	SK 13（南東より）
図版3の②	SK 22（北西より）
図版3の③	SD 03（西より）
図版4の①	SX 10（北西より）
図版4の②	SE 01（西より）
図版4の③	SE 01 断面（東より）
図版5の①	作業風景（東より）
図版5の②	出土遺物

## 表目次

第1表	調査日程表	1
第2表	出土遺物観察表	17

# 第 I 章 調査の経緯




## 1 調査にいたる経過

不馬入遺跡は、愛知県額田郡幸田町大字須美字不馬入地内に所在する。この地に建設省中部地方建設局名四国道工事事務所及び、愛知県土木部道路建設課によって、それぞれ国道 23 号岡崎バイパス建設・国道 23 号拡幅工事が行われることとなった。工事に先立ち愛知県教育委員会文化財課は、(財)愛知県埋蔵文化財センターと共に、予定地内の埋蔵文化財の包蔵状況、遺跡の広がりを確認するための確認調査を平成 2 年 6 月 6～8・11 日に行った。試掘坑からは明瞭な遺構は認められなかったものの、陶磁器片などの出土をみたことから、事前に発掘調査が必要と判断された。

(財)愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、両事業者から愛知県教育委員会を通じた委託を受け、幸田町教育委員会の協力のもと、平成 3 年 4 月から発掘調査を実施した。

## 2 調査の経過

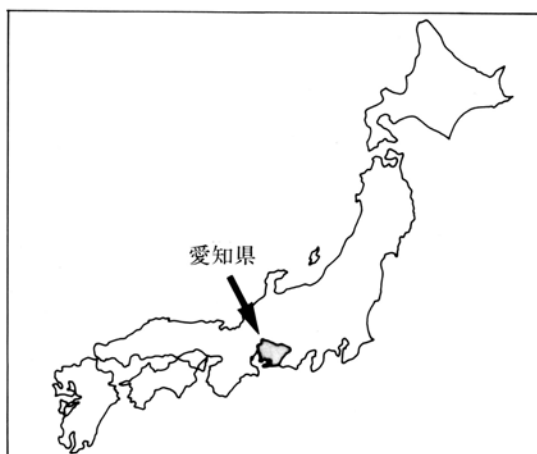
調査区はバイパス予定地・拡幅予定地が隣接していることから、あえて分割をせず一括して設定をした。この調査区に 4 月 10 日、表土剥ぎを実施し、資材搬入後、発掘作業を 4 月 12 日に開始した。調査地は斜面にあたるため、土層断面は水平ではなく、この中に大型の自然礫を含む崩壊土、盛り土が混在し、こうした砂礫土の除去に時間を要した。調査期間はほぼ 2 ヶ月を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて 6 月 7 日に調査を終了した。その後、6 月 8～9 日にかけて、現地の埋め戻し作業を行った。出土遺物の整理作業は、調査終了後洗浄、注記作業を本センター西尾事務所で行い、引続き同三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	平成 3 年 4 月	5 月	6 月
IIIKM 91	準備 	調査 	埋め戻し 

第 1 表 調査日程表

## 第II章 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置



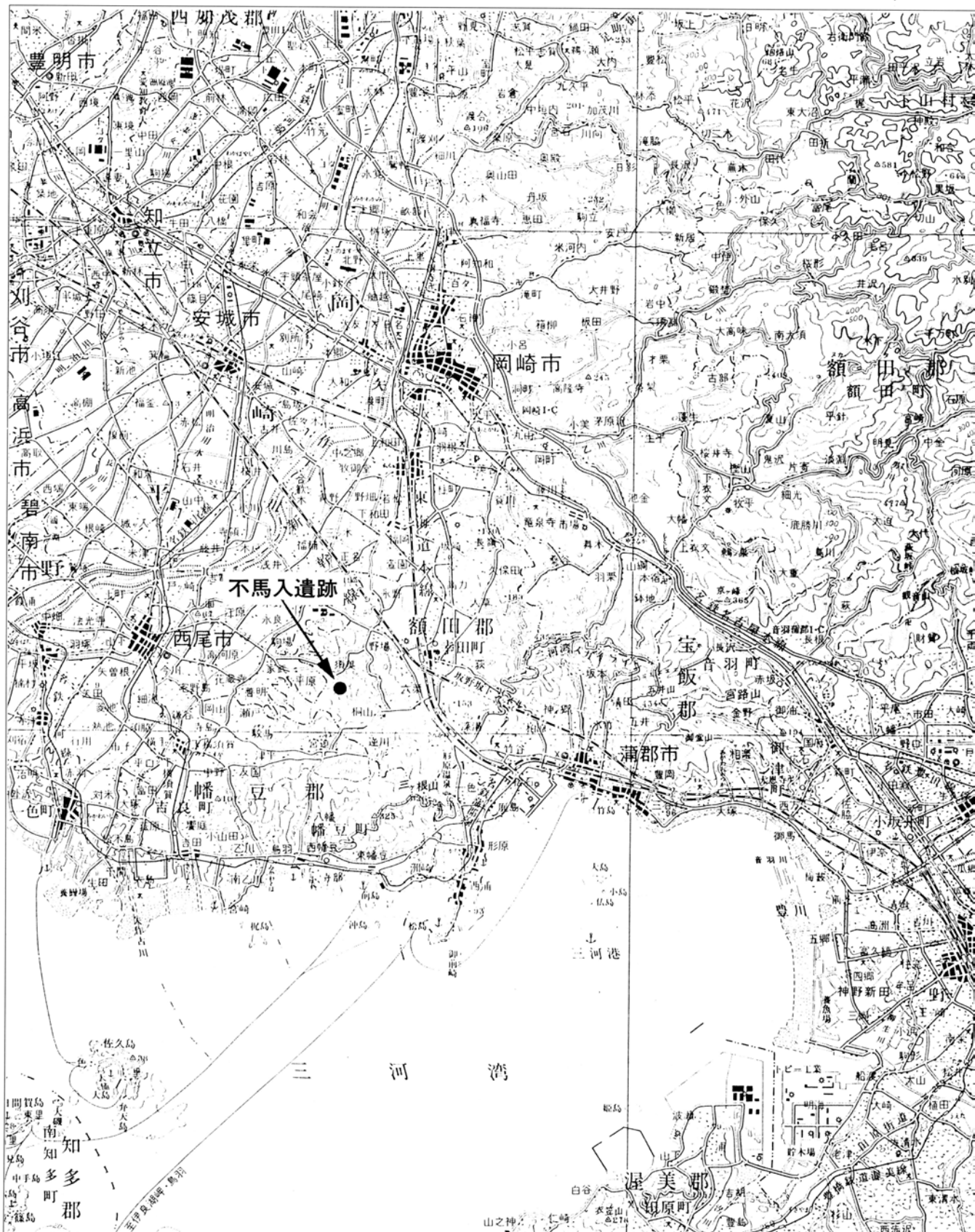
第1図 愛知県位置図



第2図 幸田町位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。不馬入遺跡の所在する額田郡幸田町は、愛知県のほぼ中央部南寄り西三河平野南端にあり、その東境は蒲郡市、南境は幡豆郡幡豆町、西境は西尾市、北境は岡崎市と接する。この幸田町の山間部は三河高原の末端にあたり、日本を代表する大断層である中央構造線の内帯にあり、この大断層に斜交していくつかの小断層が走り、複雑な地質構造を形成している。地質構造からは領家変成帯に属し、本遺跡の立地する字不馬入周辺は、領家変成岩の上に中部更新統の堆積物がみられる。

遺跡は幡豆山塊の北向き斜面の山裾に立地し、開析の進行した浅い谷に、周辺から幾筋もの沢が流れ落ちている。これらの大小河川は矢作川水系に属しており、直線距離にして約6kmで本流(矢作古川)と合流する位置にある。調査地は標高約53メートルを測り、周囲は松、杉、檜といった針葉樹を中心に、植林が丁寧に施されている。調査地は北向きではあるが、傾斜が緩やかであるため日照条件は悪くない。こうした立地から、調査地の旧態は畑地として利用され、果樹、野菜、穀類が栽培されていた。遺跡の所在する額田郡周辺の気候は、典型的な東海型気候で表日本式に属している。比較的温暖で年間を通して晴天の日が多く、特に冬期はこの傾向が顕著で降雪はほとんど見られない。県内の各地と比較してみると、海岸線に近いとはいえ幡豆山塊が壁になっているため、やや内陸型の性格を持つと思われる。



第3図 額田郡周辺地形図 (国土地理院 1/200,000 地勢図「豊橋」)

## 2 歴史的環境

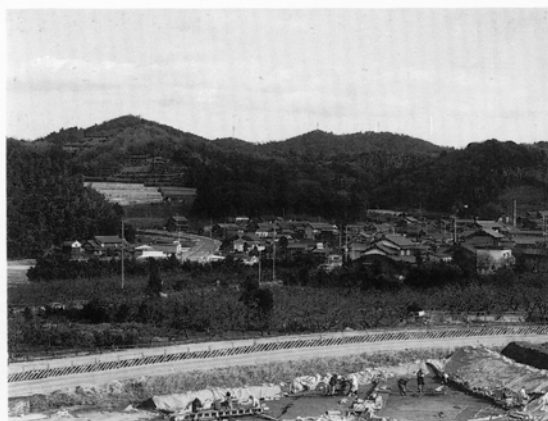
**平安期** 大字須美の集落を南に見下ろす丘陵の一角に、蘇美天神社（祭神 建速須佐之男神）が位置している。この神社は『三河国内神明名帳』にも記載され、遅くとも平安時代末期にはこの地の開発が進められていたことを示している。また、『伊勢大神宮神領注文』によれば、この地は古くからの神領であり、保延六年(1140)に再寄進され、久安元年(1145)には伊勢外宮領「蘇美御厨」として奉免の宣旨を被ったことが知られる。これらのことからして、伊勢神宮勢力のこの地への進出は、平安時代中頃にまでさかのぼることは間違いないところである。

**鎌倉期** 須美集落の西の端、大字牛ノ松には鎌倉時代を中心とする牛ノ松遺跡がある。最近の発掘調査によれば、谷を隔てた東西にそれぞれ溝（堀）によって囲まれた数件の屋敷地が確認され、灰釉系陶器のほか、輸入陶磁の青磁・白磁・宋三彩、墨書土器などの出土がみられた。鎌倉期における須美集落内の有力者（在地小領主）の存在と、発展を窺い知ることができる。

**南北朝期** 須美は依然として神宮領として史料の上では見いだされる。延文五年（1360）成立の『神風鈔』に「外宮領 蘇美御厨」と見られることが明らかである。ところが遡ること24年すなわち建武三年（1336）には、吉良庄の吉良満義が今川氏兼に「三河須美保政所職」を与えており、在地における支配権は徐々に武士が掌握していったことが窺われる。現在の西尾・幡豆・幸田の一部は、東・西吉良氏の支配するところとなっていた。

**南北朝～戦国期** 幡豆山塊の東側すなわち現在の国道248号・東海道本線沿いには、大庭（深溝城）・夏目（六栗城）・岩堀（東部城）・西郷（大草城）・高力・熊谷・築田（高力城）・天野・平岩（坂崎城）といった小領主層の台頭が見られる。また、西の広田川・矢作古川沿いにおいても吉良氏被官の荒川（荒川城）・戸ヶ崎（戸ヶ崎城）・伊奈（小島城）・浅井（浅井東・西条）・江原（江原城）などの諸氏が確認されている。

こうした小領主層分立の中にあつて、須美がどのような支配のもとにあつたのか不明であるが、少なくとも東条吉良氏の本領としての位置に変わりはないと思われる。永祿

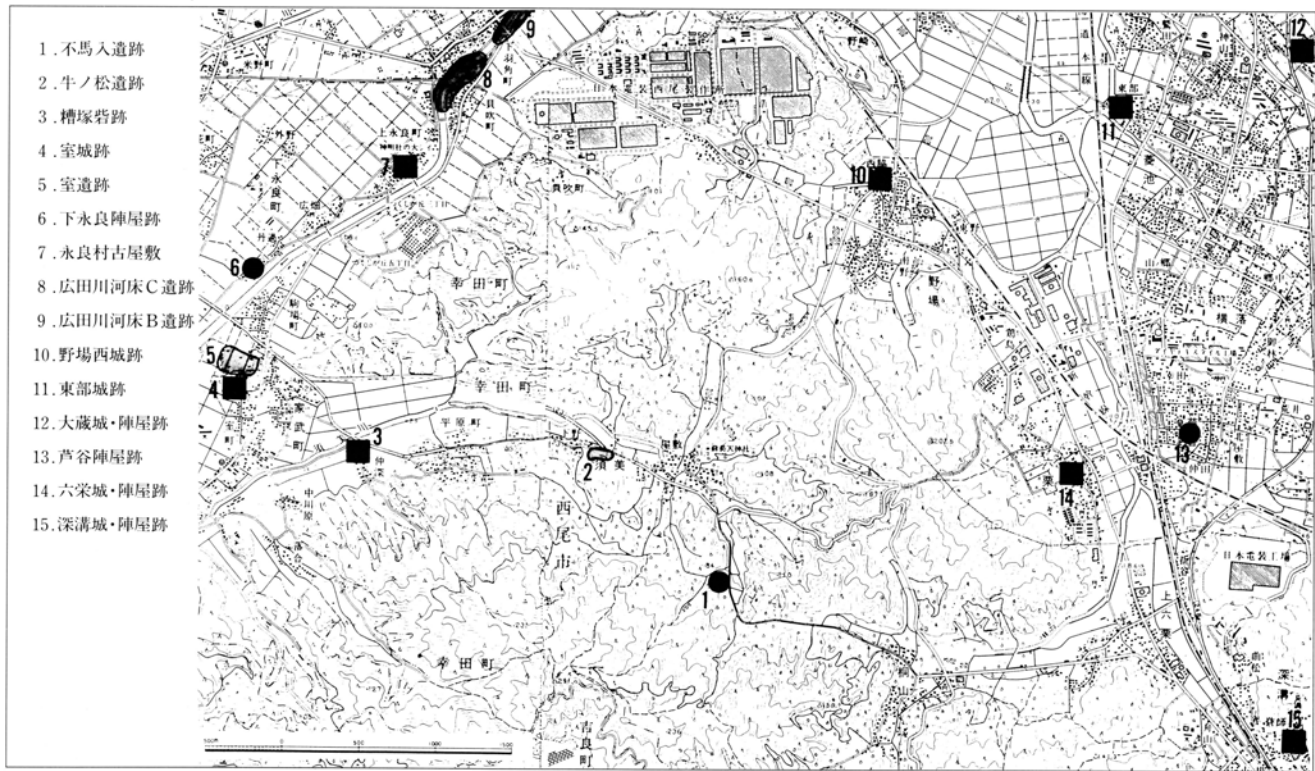


第4図 蘇美天神社遠景



第5図 牛ノ松遺跡A地区





第6図 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図「西尾」・「幸田」)

四年 (1561)、吉良義昭が松平元康に降伏した際、「東条本地之内」須美などが長沢松平親広・康忠に与えられていることから明らかである。また、天文十八年 (1550) の『本證寺門徒連判状』に、「すみ浅井八右衛門尉信忠」の名が見え、武士身分の人物が居住していたことも明らかである。

幡豆山塊の東西を結ぶ中世のルートは、深溝から逆川を通過して吉良に出るコース、上六栗から桐山・須美を通過して家武 (西尾) に出るコース、それに幡豆山塊を北で迂回する広田川沿いのコースがあった。16世紀初め、東条吉良氏が須美の西方 2 km の位置に室城 (連郭式平山城・城主富永氏) を創建したのも、深溝松平氏による吉良庄侵攻の際に、桐山・須美コースの守りを固める上での要衝の地であったからにほかならない。

**江戸期** 慶長六年 (1601) に須美は旗本板倉伊賀守勝重領となり、天和元年 (1682) に天領となるまでは、代々板倉氏の領地としてその支配を受けた。このとき勝重領となったのは、いずれも三河国幡豆郡吉良庄内の 11ヶ村であり、現在幸田町に所属する須美・六栗もそのうちに含まれていた。貞享四年 (1687) 以降、須美村は甘繩藩分家松平地頭領 (松平斎宮為政領) として、一時天領に編入されることもあったが、明治維新まで存続した。支配陣屋は、当初は吉良の小牧陣屋、後に幡豆の欠陣屋であった。

村高は、元禄以降 342 石であり、享和 2 年 (1802) の村明細書帳によれば、家数 91、馬 4、反別は本田 16 町余・田畑成 4 町余・茶畑 5 町余・新田 1 町余で、高札場 1、郷倉 1、百姓持林山 10 町余りであった。また農間稼ぎは、男は山稼ぎ・藁細工、女は織機稼ぎで、職人は大工 2 とある。不馬入遺跡をそのうちに含む須美村は、幡豆山塊の裾野に開けた農村であり、前代からの街道が村域内を通過していた。

## 第II章 遺跡の立地と環境

須美村の隣村桐山は、吉良の小牧陣屋の支配を受けており、年貢納入にあたっては須美を通ったことは想像に難くない。また、江戸期の産業の発達と街道の整備により、須美を通る街道は「平坂街道」と呼ばれ、東三河の小坂井方面から御津・蒲郡・深溝・上六栗・桐山・須美を通して、平坂湊に達していた。平坂湊は、当時矢作川の船運によって上流の足助・信州方面との物資の交易が盛んであり、それらの品物を江戸・大坂などへ送り出す海運の基地でもあった。それだけに、年貢米や特産品その他の物資を運搬する上で、この平坂街道の果たした役割は大きかった。

明治26年作成の大日本帝国陸地測量部「深溝村」地形図によれば、上六栗から桐山・須美に至る道路は「平坂街道」と明示しており、須美川を下って家武村に伸びている。不馬入遺跡はこの街道沿いにあり、また遺跡の脇から山中に入って平原村に至る道路の分岐点でもある。村人の伝承によれば、古くはこの不馬入・平原ルートが使われていたという。

ともあれ不馬入遺跡はかかる街道沿いに残された江戸時代の人々の営みの跡である。

第7図 不馬入遺跡と街道位置図（大日本帝国陸地測量部「深溝村」 明治26年）

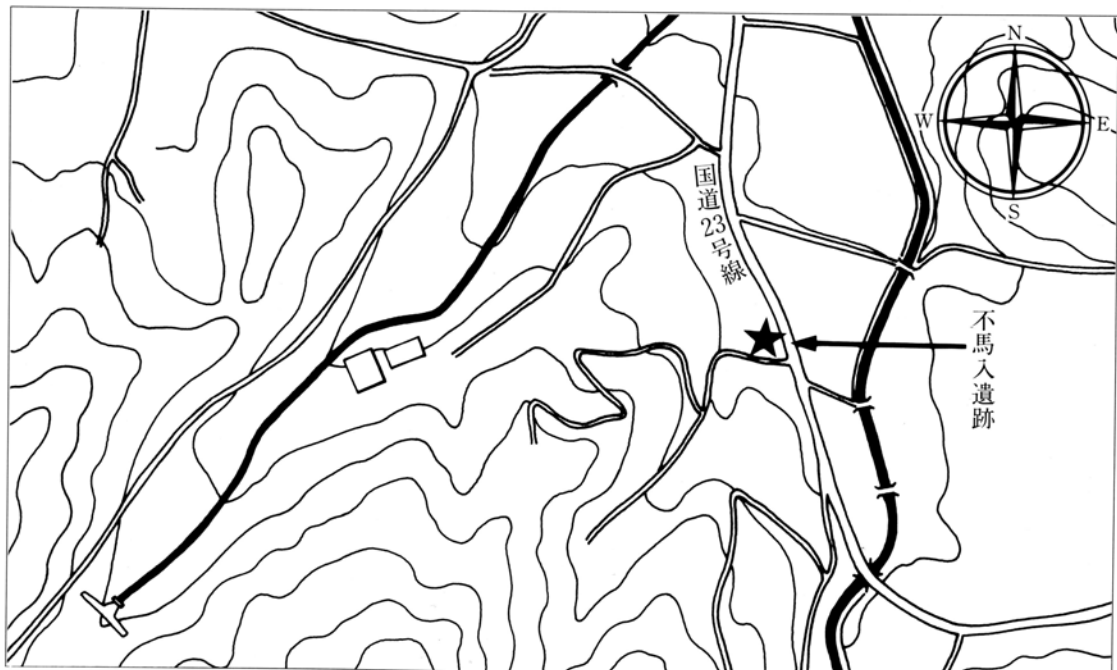
## 第III章 調査の概要

### 1 調査区

本調査に先立って行われた確認調査の結果から、不馬入遺跡は国道23号岡崎バイパス建設予定地と、国道23号拡幅工事予定地に展開している可能性が考えられたため、調査区は両予定地にわたって設定した。この調査区はいずれも畑地、果樹園として利用されてきた場所であり、須美川によって開析された中位段丘に発達した須美集落から、距離にして1,000 m程南へ登った地を開けた北向きの緩やかな斜面である。そしてこの傾斜は、北側の山裾に近接するにしたがってきつくなってゆく。陽あたりは北向きではあるが緩斜面であるために比較的良好で、乾燥した水はけのよい土地であったため、調査にとって水はけよりも乾燥の方が障害であった。

### 2 調査の方法

調査区内の表土の除去は、機械（バック・ホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、調査区西に排土置場を設けこれををまとめた。調査区内には50 cm幅のトレンチを壁面に沿って入れた。これによって人為的な掘り込み・包含層の存在が確認できた。この調査区においては掘り込み面が複数でないことが確認できたため、掘り下げに際しては、実質的にはグリッド毎に検出作業を繰り返して基盤層に到達する方法をとった。

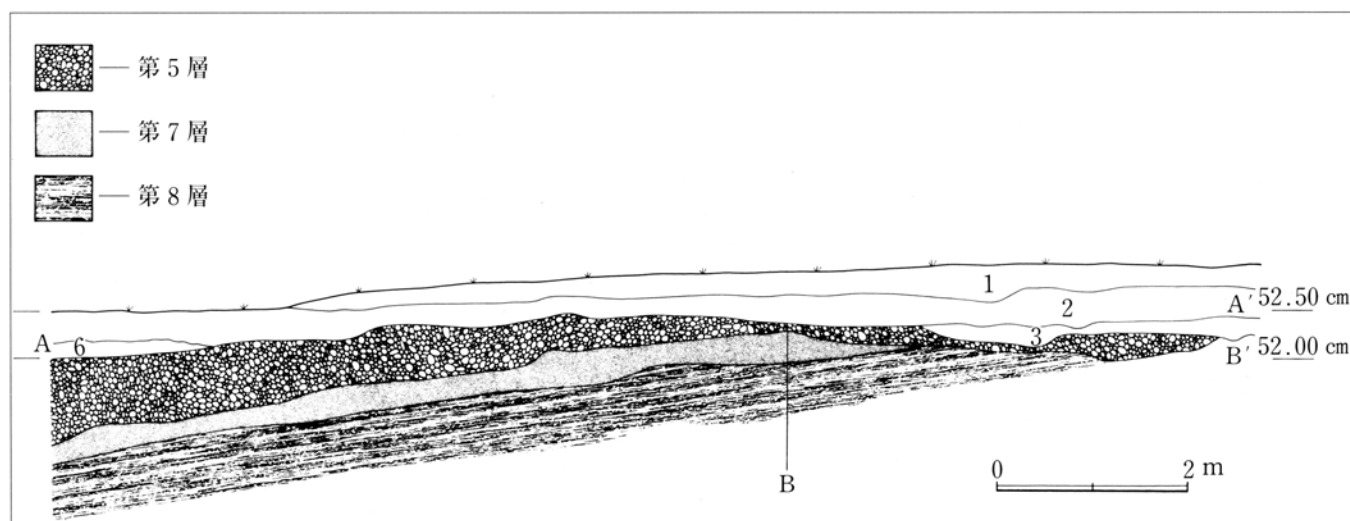


第8図 調査区位置図 (1/4,000)

## 第IV章 遺 構

### 1 基本層序

不馬入遺跡の基本層序を概観すると、第6図のような状況がみてとれる。地表面は標高52.5～53.0 mで、地表直下には客土（第1層）または旧耕作土（第2層）である暗黄褐色シルトが15～30 cm程堆積していた。調査区全体を覆っているのはこの客土及び旧耕作土のみであったため、表土除去作業はこれらの層の直下までとした。その下には部分的に赤褐色シルト（第3層）、赤褐色粘質土（第6層）が15～30 cm程堆積していたが、これらには人為的な性格は認められず遺構とは認定し得なかった。この下には暗黄褐色シルトが混じる径5～20 cmの角礫層（第5層）が10～100 cmの厚さで堆積していた。この層には近世後期の陶磁器片が含まれており、本遺跡の遺物包含層にあたる。この角礫層の下に、基盤層として明赤褐色砂質シルト層（第7層、通称「山砂」）、岩盤（第8層）が斜面堆積しているのが確認できた。この斜面堆積をした基盤層は、表土（第1・2層）を除去した時点で部分的に露呈しており、調査区の壁面においてもこれらの層が水平方向に削平されていることが確認できた。したがってこの地は平坦面（第9図・A線）を確保するために、これらの基盤層を標高52 m程の高さで削平した（第9図・B線）後、さらにこの面積を広げるために盛土（第5層）を近世後期に行ったと考えられる。



第9図 調査区東壁断面図

## 2 遺構

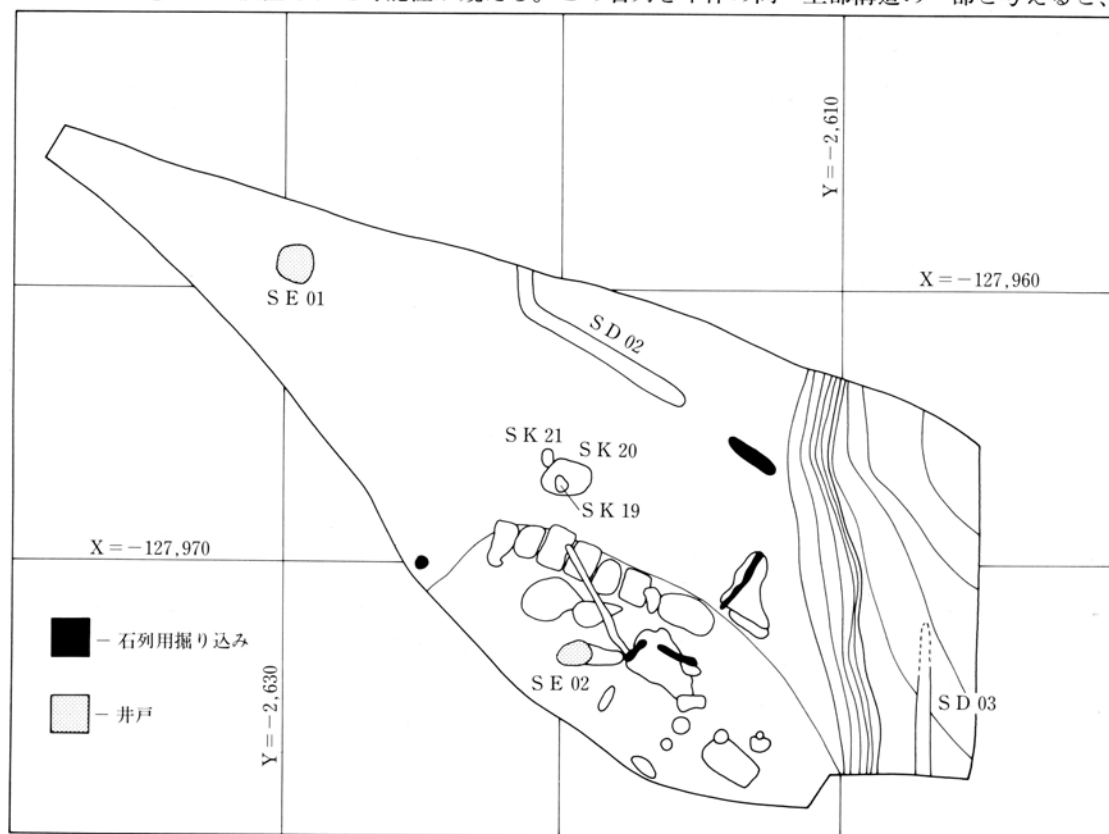
本遺跡で検出した遺構は、土坑（SK）23基、溝（SD）3条、井戸（SE）2基、その他不定形な掘り込み（SX）6カ所である。

遺構検出面は、いずれも概ね標高52~53mである。この検出面は、基本層序の項でも述べたように近世の整地された面であるため、基盤層が露呈している部分と、盛土で築かれた部分とがみられた。こうした部分に掘り込まれている遺構は、出土遺物から江戸時代後期のものと思われる。

これらの遺構の中で一定の規格性、方向性が窺われたのは、SK 10~18 にいたる土坑列及び、調査区中央に展開する石列、南側に位置する柵列の可能性が考えられる土坑である。

土坑列は標高53.2mのコンターに沿うように、東西方向（E—25.6°—S）に並んでいる。これらの土坑のうちSK 12~18は、類似する形状、規模でわずか数cmの間隔で掘られており、時間差をもってこうした土坑列が成立したとは考えにくい。なんらかの目的をもって同時期に掘り込まれた可能性が高いものと思われる。これらの土坑からの出土遺物はSK 10以外では確認できず、時期差を比較することができなかった。

調査区中央付近の石列は、まず石を置くための掘り込みが行われた後、その中に石を1~数个並べたものである。こうした痕跡からこの石列は、なんらかの上部構造をつくる基礎として設置された可能性が窺える。この石列を単体の同一上部構造の一部と考えると、



第10図 調査区遺構位置図

#### 第IV章 遺構

平面形態は方形とはなり得ず、一部（南東角）にクランク状の引っ込みを持つ形態が考えられる。これらの石列は、前述した土坑列を切っている溝（SD 01）をさらに切っており、少なくとも土坑列よりも後につくられたことが見て取れる。

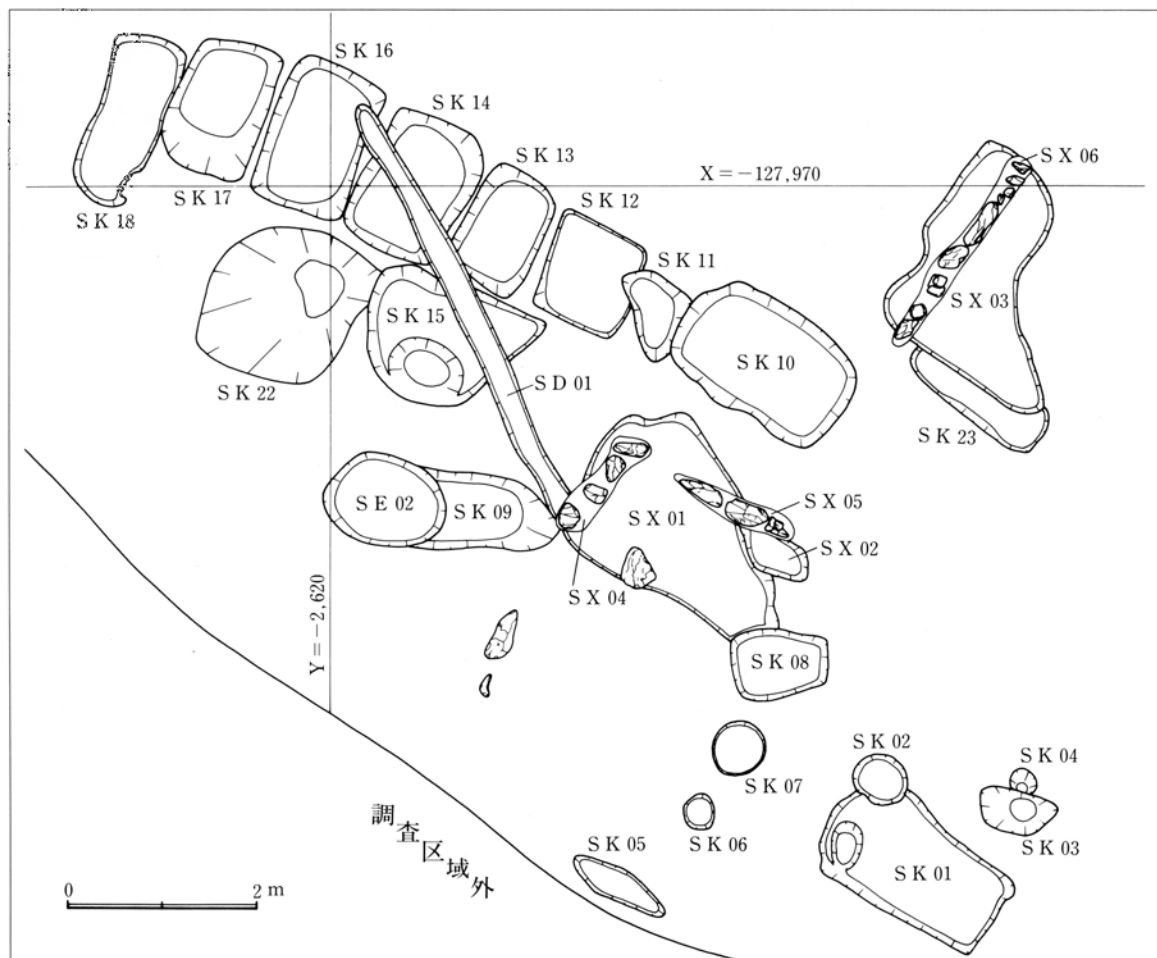
SK 02~07の土坑はいずれも素掘りで、無遺物であるが埋土は締りが強く、基盤層のブロックが攪乱状に多量に混じっている。柱痕等は検出し得なかったが、掘り込まれた後、時間を経ずして意識的に埋められたものと思われる。これらの土坑は、石列のクランク状の引っ込みから南東方向に並列して位置している。柵列の可能性を指摘したのは以上のような理由による。

調査区内の遺構のうち空間的特質、相互関係について、わずかながら手がかりとなり得るものを掲載した。しかし近世後期のものと思われるこれらの遺構は、その目的、性格まで判断できる材料とはなり得ない。以下、各遺構について説明する。

#### 土坑

SK 01 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.16 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径2.1 m、短径1.2 m、深さ0.1 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とする。SK 02に切られている。

SK 02 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.15 mを測り、平面形態は不整円形を呈し、



第11図 土坑列付近平面図

- 直径0.6 m、深さ0.04 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とし、S K 01を切っている。
- S K 03 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.16 mを測り、平面形態は不整形を呈し、長径0.8 m、短径0.5 m、深さ0.03 mを測る。埋土は明黄褐色シルトを基調としS K 04を切っている。
- S K 04 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.14 mを測り、平面形態は円形を呈し、直径0.3 m、深さ0.2 mを測る。埋土は赤灰褐色シルトを基調とし、S K 03に切られている。
- S K 05 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.09 mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径1.1 m、短径0.35 m、深さ0.13 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とする。
- S K 06 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.09 mを測り、平面形態は不整形を呈し、直径0.38 m、深さ0.13 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とする。
- S K 07 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.1 mを測り、平面形態は不整形を呈し、断面形態は垂下しつつもやや北東方向にオーバーハングしている。直径0.56 m、深さ0.2 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とする。
- S K 08 調査区南側東寄りに位置する。検出高は53.1 mを測り、平面形態は不整形を呈するものと思われ、残存長径0.9 m、短径0.7 m、深さ0.12 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とし、S K 24に切れ、S X 01を切っている。
- S K 09 調査区中央やや南側に位置する。検出高は53.1 mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと思われ、残存長径1.5 m、短径0.8 m、深さ0.38 mを測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とし、S E 02に切られている。
- S K 10 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は53.2 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈していたと思われ、残存長径1.9 m、短径1.2 m、深さ0.2 mを測る。埋土は混土（淡灰褐色シルト）礫（径5～40 cmの角礫）層で、近世後期の陶磁器が含まれていた。この角礫は南西隅及び南東隅に直角のコーナーを設けた痕跡が認められるため、なんらかの目的をもって石を組んだ可能性が窺える。S K 11に切られている。
- S K 11 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は53.2 mを測り、平面形態は不整形を呈し、長径1.0 m、短径0.6 m、深さ0.42 mを測る。埋土は淡灰白色シルトを基調とし、径5～20 cmの角礫を多く含む。S K 10、S K 12を切っている。
- S K 12 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は53.2 mを測り、平面形態は方形を呈し、長径1.1 m、短径0.95 m、深さ0.31 mを測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径5～20 cmの角礫を多く含む。S K 11に切られている。
- S K 13 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は53.2 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径1.2 m、短径0.8 m、深さ0.33 mを測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径5～20 cmの角礫を多く含む。S D 01に切られている。
- S K 14 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は53.2 mを測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径1.5 m、短径1.1 m、深さ0.75 mを測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径5～30 cmの角礫を多く含む。S D 01に切られている。

#### 第IV章 遺構

- S K 15 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.2 m を測り、平面形態は不整形を呈し、長径 1.8 m、短径 1.3 m、深さ 0.23 m を測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径 5～30 cm の角礫を多く含む。S K 22 を切り、S D 01 に切られている。
- S K 16 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.2 m を測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.6 m、短径 1.1 m、深さ 0.5 m を測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径 5～30 cm の角礫を多く含む。S D 01 に切られている。
- S K 17 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.2 m を測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.4 m、短径 1.0 m、深さ 0.38 m を測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径 5～30 cm の角礫を多く含む。
- S K 18 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.2 m を測り、平面形態は不整形を呈し、長径 1.8 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、径 5～30 cm の角礫を多く含む。
- S K 22 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.1 m を測り、平面形態は不整形を呈するものと思われ、長径 1.6 m、短径 1.5 m、深さ 0.5 m を測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、径 5～20 cm の角礫を含む。S K 15 に切られている。

#### 溝

- S D 01 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.08～53.2 m を測り、軸線の方向は N-27°—W を示す。残存長 4.7 m、溝幅 0.2～0.3 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は赤褐色シルトを基調とし、S K 13～16 を切り、石列に切られている。
- S D 02 調査区中央北寄りに位置する。検出高は 52.87～52.97 m を測り、軸線の方向は N—59°—W を示し、調査区北端で約 45° この軸線から北寄りに方向が変えられている。残存長 7.2 m、溝幅 0.4～0.7 m、深さ 0.27 m を測る。埋土は淡灰褐色シルトを基調とし、近世後期の磁器が出土している。
- S D 03 調査区東側南寄りに位置する。検出高は 51.9～52.3 m を測り、軸線はほぼ南北ライン(N—0°—W)を示す。残存長 5.2 m、溝幅 0.25～0.55 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とする。

#### 不定形な掘り込み

- S X 01 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.1 m を測り、平面形態は不整形を呈するものと思われ、長径 2.7 m、幅 1.8 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、石列・S K 08・S X 02 に切られている。
- S X 02 調査区中央やや南寄りに位置する。検出高は 53.1 m を測り、平面形態は不整形を呈するものと思われ、残存長径 0.9 m、短径 0.4 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は明黄褐色シルトを基調とし、石列に切れ、S X 01 を切っている。
- S X 03 調査区中央やや東寄りに位置する。検出高は 53.0 m を測り、平面形態は不整形を呈し、南北片 2.2 m、東西片 2.1 m、深さ 0.18 m を測る。埋土は明黄褐色シルトを基調とし、石列に切れ、S K 23 を切っている。



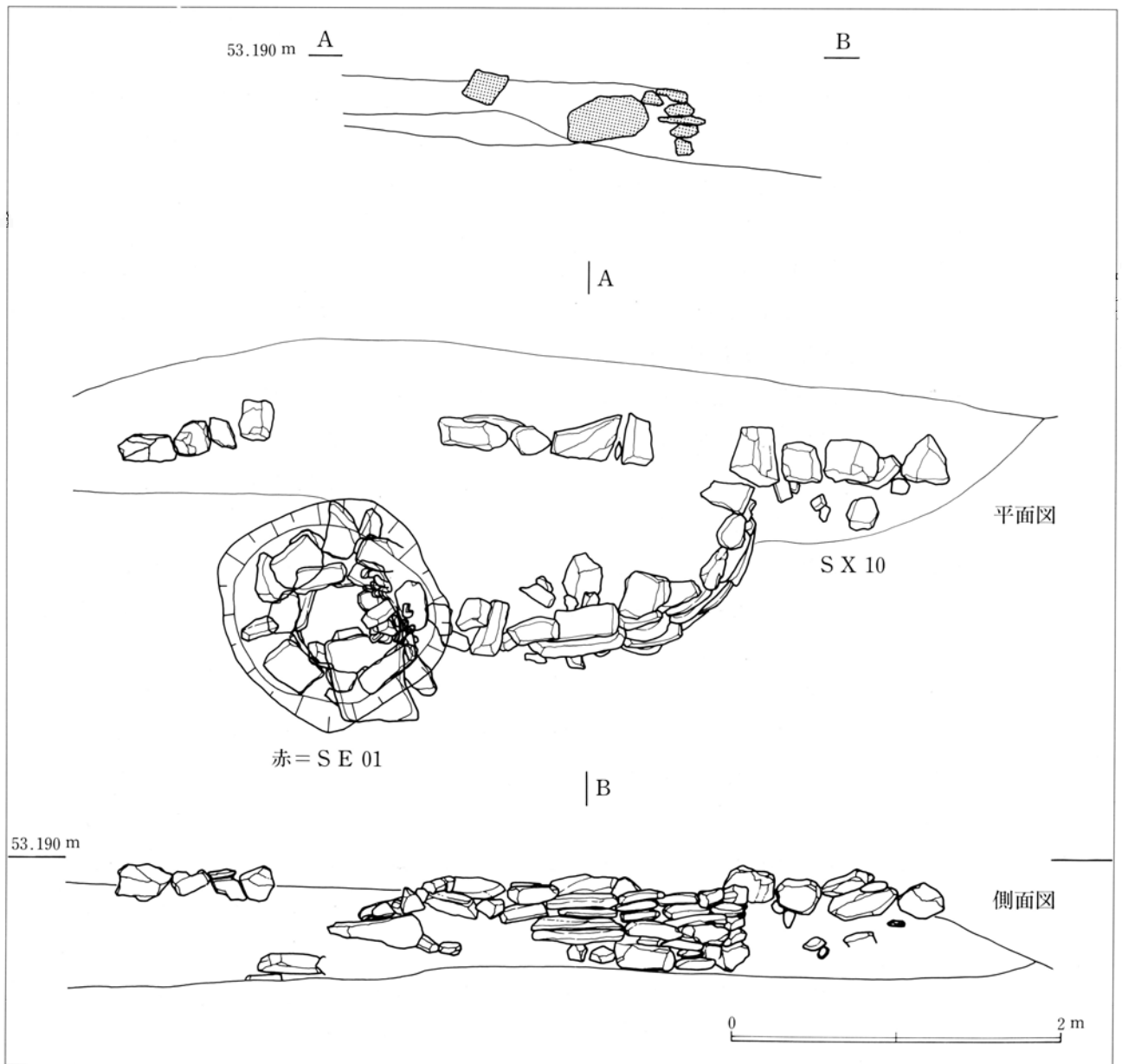
第IV章 遺構

S X 10 調査区西側に位置する。検出高は53.15 mを測り、平面形態は直線状の石組列の中途に、逆「S」字状の石垣列が組み合わされた形状を呈し、残存石組列は5.1 m、逆「S」字状の石垣列は総延長約4.0 mを測る。S E 01を埋設した上に築かれている。

井戸

S E 01 調査区西側に位置する。検出高は52.5 mを測り、平面形態は掘り形が不整形を、石組内側が不整形を呈し、掘り形の径は約1.3 m、石組内側の径は約0.5 m、掘り形上端からの深さは約2.0 mを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、S X 10に切られている。

S E 02 調査区東寄りやや南側に位置する。検出高は53.1 mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径1.3 m、短径1.0 m、深さ1.6 mを測る。埋土は明赤褐色シルトを基調とし、S K 09を切っている。



第12図 S X 10 断・平・側面図 S E 01 平面図

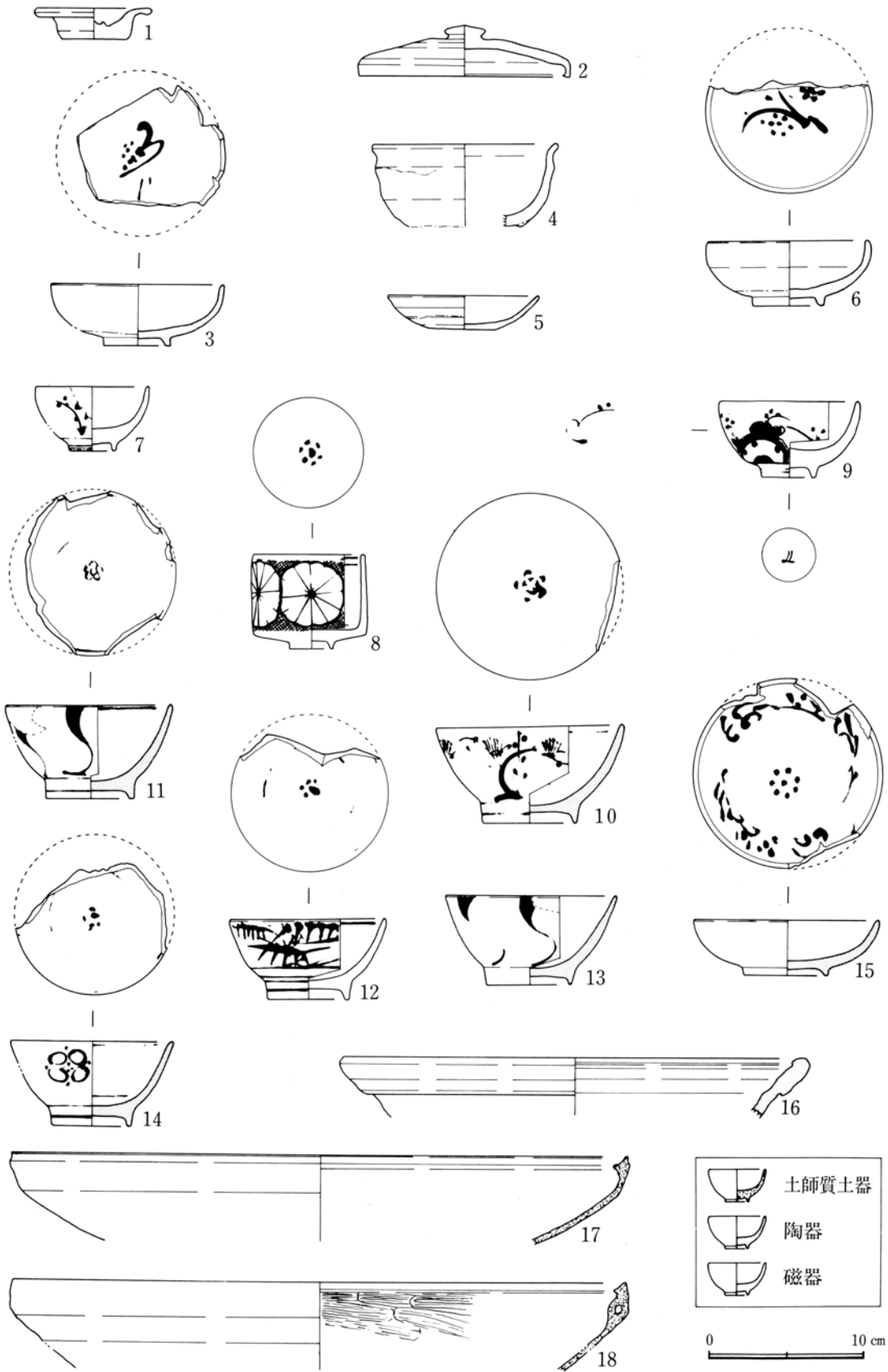
## 第V章 遺物

本遺跡から出土した遺物は、量的には少量で、種類も陶器・磁器・土師質土器に限られた。器種構成は、蓋・椀・皿・鉢・鍋であるが、完形品またはそれに近いものはほとんど含まれていなかった。このうちある程度まとまって出土したものは、SK 10 出土遺物のみである。これら出土遺物の時期については、近世でも後期のものが主体を成すかと思われる。

1～6・10・11・13～16は瀬戸・美濃産陶器である。この中で蓋・椀・皿類の器種分類については、藤澤良祐氏が勇右衛門窯（愛知県瀬戸市）における出土遺物で詳細な分類を行っているため、これに依拠する。1・2は陶器の蓋である。1はつまみのない落し蓋で、平底で笠部は外反する。2は円形につまみを有する笠形の蓋で、外面全体に灰釉が施されている。3・5・6・15は皿である。15は藤澤分類皿Ⅰ類の染付皿で、体部内面に染め付けが施され、見込み部には五弁花が呉須で描かれている。3・6は藤澤分類皿Ⅱ類にあたり、内面には呉須・鉄釉で梅文が描かれている。Ⅰ類に比べて開きが弱く、やや深い。5は灯明皿のうち油皿で、口縁端部から内面を除いた部分には、全体に錆釉を施した後ぬぐい取られた痕跡がある。見込み部には重ね焼き痕が残る。4・10・11・13・14は椀である。4は藤澤分類による茶碗Ⅰ類にあたり、高台脇近くまで全体に厚く鉄釉が施され、この上から口縁内外面にうのふ釉が漬け掛けされている。この椀は「天保十三年寅四月・・」と書かれた紀年銘資料が名古屋城二の丸庭園から出土しており、19世紀前半代の使用が窺える。10・11・13・14は藤澤分類による茶碗Ⅲ類にあたり、広東茶碗と呼ばれているものである。本遺跡から出土した広東茶碗には高台と体部が直線的につながるⅢB類は見られず、いずれも高台がほぼ直立するⅢA類で、大（10）と小（11・13・14）に分けられる。いずれも見込み部には五弁花が施され、松竹梅文（10）・捻り文（11）・花文（14）などが呉須で描かれている。16は播鉢で、本業焼における藤澤分類播鉢Ⅱ類にあたる。口縁端部は内側に折り返されており、鉄釉系の釉が内外面に施されている。

7・8・9・12は磁器の椀である。8は染付筒茶碗で体部は筒形に直立しており、高台径はかなり狭い。体部外面には菊花繫に斜格子が描かれ、見込み部には五弁花が呉須によって施されている。12は広東茶碗で体部外面には笹文が、見込み部には五弁花が呉須によって施されている。7・9は小型のいわゆる「くらわんか茶碗」で、丸腰で厚手の体部に特徴を持つ。7には体部外面には草花文が施され、9には雪輪に梅樹が描かれ底部には大明年製崩しが書かれている。

17・18は土師質の鍋である。17は破片であるため耳部の確認ができないが、いずれも内耳鍋と思われる。2点とも口縁内側には紐状粘土を貼り付けて、蓋受け形の張り出しを設けており、18はその下に耳部を貼り付けている。



第13図 出土遺物実測図

## 第VI章 まとめ

本遺跡では調査の結果、遺物の一括性はあまり認められなかったものの、近世の人々の足跡が印されていることが判った。ここに今回の発掘調査の意義、問題点について簡単に触れておく。

不馬入遺跡の立地する場所は、歴史的環境の項でも述べられているように旧平坂街道に沿う位置にある。街道を中心に位置関係を考えてみると、東三河沿岸部と西三河平野部を結んでいるこの街道のほぼ中間点に調査地は位置している。この地は山間部にあり立地環境は、平野部が多くを占める街道全体の中ではやや性格を異にする。また、近世、近代の絵図・地図などを見ても、この地に民家などは確認できず、それぞれの集落（生活域）からは離れた土地であったようである。こうした性格を持つ調査地で今回確認できた主たる事実は、平面を確保するための造成の痕跡、なんらかの上部構造が想定できる石列と井戸（SE 01）、饗応に使用された可能性が窺える遺物（4の椀などは当時の雑器とは一線を画する）の出土である。少ない材料ではあるがこれらのことから本遺跡には、街道に依存するなんらかの建物施設が、近世後期（19世紀代）に存在した可能性も考えられる。

近世を対象とした発掘調査は、城郭またはそれに付随する場所に片寄りがちである。しかしこうした調査は、近世の都市遺跡解明には有効な資料となるが、都市部にのみ人々の生活が存在しているわけではない。本遺跡の調査において確認できた遺構、遺物は、この地域における近世の人々の足跡を考えると、有効な資料となるであろう。さらに視点を広げ、交通史などこの地域の近世の未解明な部分を明らかにしてゆくためには、こうした資料の増加が望まれる。

図版 ※番号	遺 構	器 種		法量 (cm)			釉薬・調整等		産 地	登録 番号	備 考
				器高	口径	底径	内面	外面			
1	S K 10	陶器	蓋	2.0	7.0	4.2			瀬戸・ 美濃系	E-1	
2	S K 10	陶器	蓋	3.3				灰釉	瀬戸・ 美濃系	E-2	
3	S K 02	陶器	皿	4.0		4.2	呉須・鉄釉		瀬戸・ 美濃系	E-3	梅文
4	検出 I	陶器	椀				鉄釉・ うのふ釉	鉄釉・ うのふ釉	瀬戸・ 美濃系	E-4	
5	S K 14	陶器	皿	2.2	9.7	4.2	錆釉	錆釉	瀬戸・ 美濃系	E-5	
6	S K 10	陶器	皿	4.2	10.3	4.6	呉須・鉄釉		瀬戸・ 美濃系	E-6	
7	S K 24	磁器	椀	4.2		3.0		呉須	肥前系	E-7	草花文
8	検出 II	磁器	椀	6.2	7.2	2.8	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-8	菊花繫に斜格子
9	検出 II	磁器	椀	5.0	9.0	3.5		呉須	肥前系	E-9	雪輪に梅樹文 底部に大明年製崩し
10	S K 10	陶器	椀	6.3	11.9	6.0	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-10	松竹梅文 見込み部に五弁花
11	S D 02	陶器	椀	6.1	10.6	5.7	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-11	捺り文 見込み部に五弁花
12	S K 10	磁器	椀	5.2	10.1	5.2	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-12	笹文 見込み部に五弁花
13	S K 10	陶器	椀	5.8	11.1	5.5	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-13	捺り文 見込み部に五弁花
14	石組内	陶器	椀	5.6		5.0	呉須	呉須	瀬戸・ 美濃系	E-14	花文 見込み部に五弁花
15	石組内	陶器	皿	3.6	12.0	5.4	呉須		瀬戸・ 美濃系	E-15	見込み部に五弁花
16	S D 02	陶器	鉢				鉄釉	鉄釉	瀬戸・ 美濃系	E-16	
17	S K 10	土師質土器	鍋							E-17	
18	北トレンチ西	土師質土器	鍋							E-18	

第2表 出土遺物観察表

※器種名のうち、「わん」に用いた文字は、引用名、通称を除いて「椀」に統一した。

参考文献

藤澤良祐 1987 「西茨第2号窯(勇右衛門窯)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』

瀬戸市歴史民俗資料館

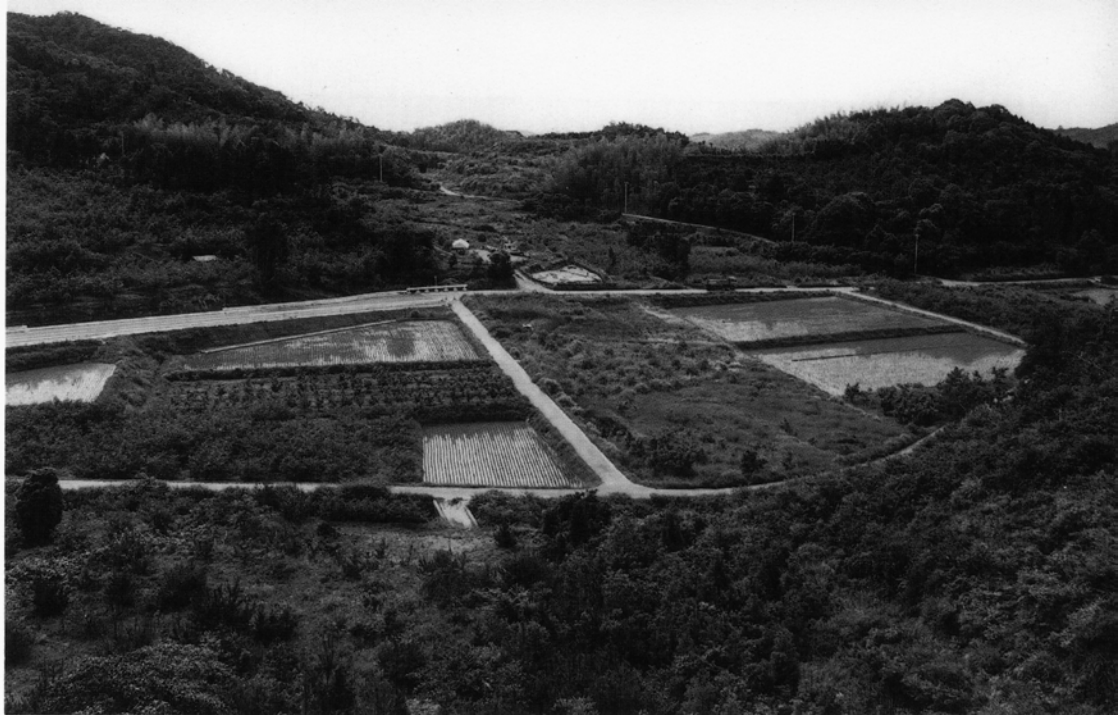
## 報告書抄録

フリガナ	メイラズイセキ
書名	不馬入遺跡
副書名	
総次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	松田 訓・大橋正明
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24
発行年	西暦 1993 年 3 月 30 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	南緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
メイラズ 不馬入	ヌカ タ グンコウ ダチヨウオオアザ 額田郡幸田町 大字 スミアザメイラズ 須美字不馬入	23502	——	34°50'47"	137°8'17"	19910410 19910607	400	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺築		主な遺物		特記事項
不馬入	住居跡	江戸時代	土坑	23	陶器	蓋・椀・皿	
			井戸	2	磁器	椀	
			溝	3	土器	鍋	

圖  
版



①遠景  
(東より)

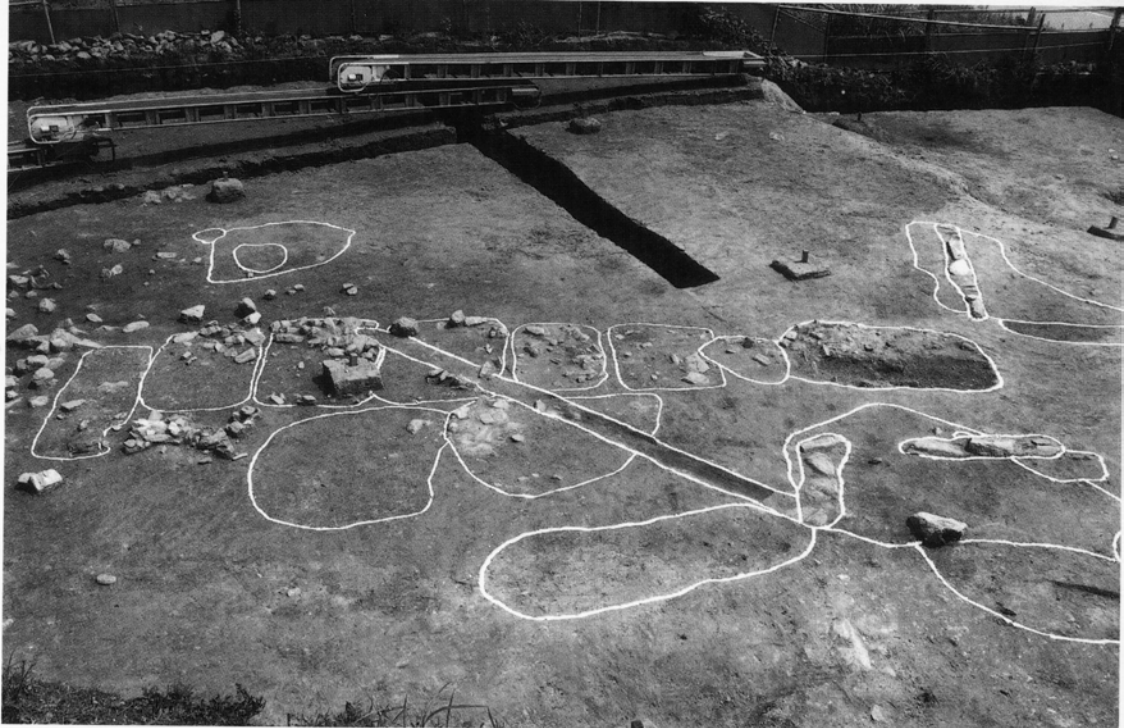


②近景  
(東より)

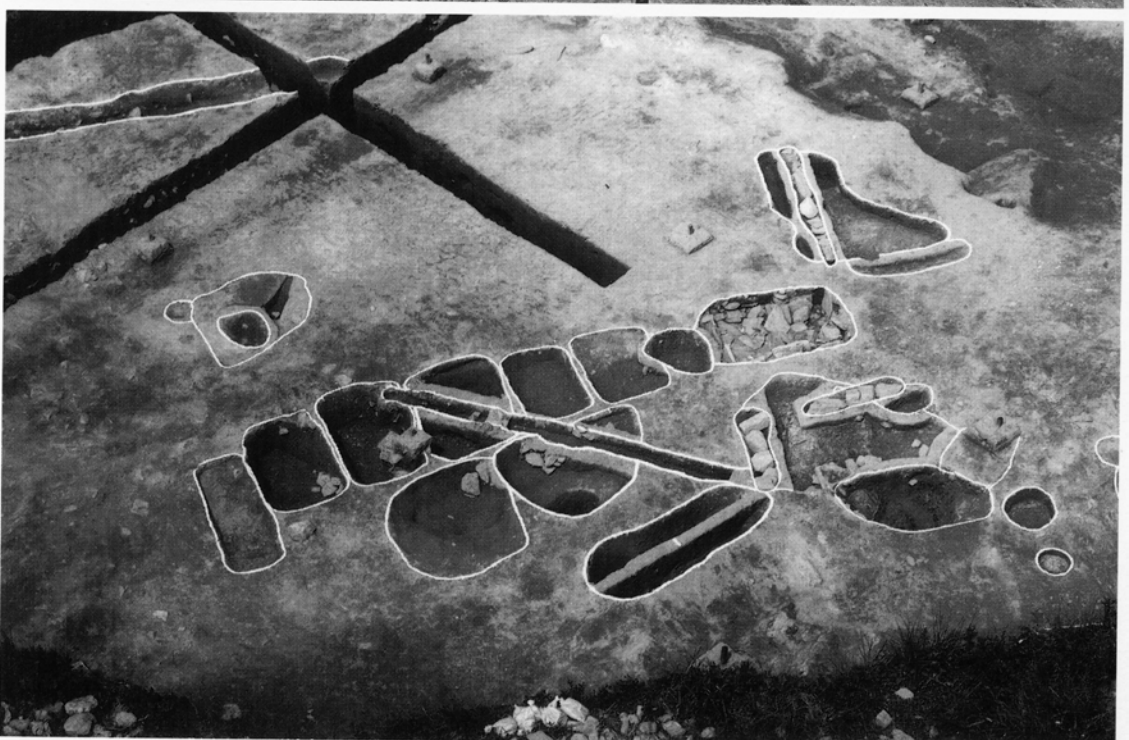


③全景  
(南西より)

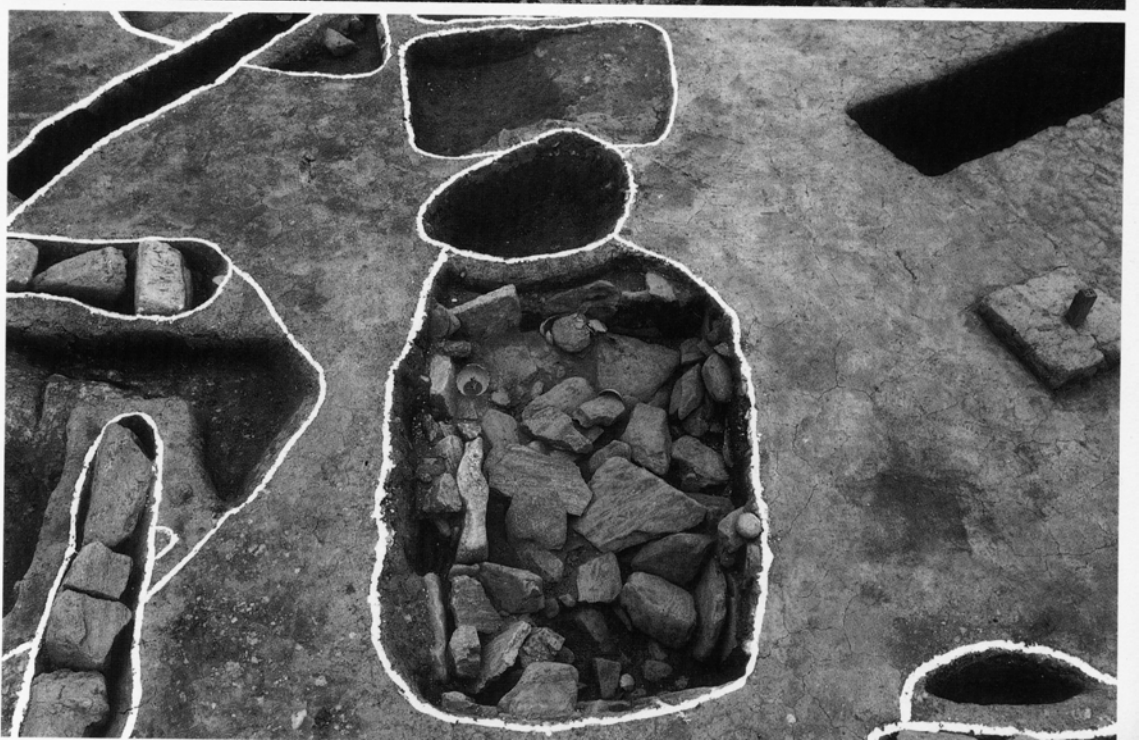




①調査区中央  
検出状況  
(南西より)



②同上  
完掘状況  
(南西より)



③SK 10  
(南東より)

①SK 13  
(南東より)



②SK 22  
(北西より)



③SD 03  
(西より)





①特殊石組遺構  
(北西より)



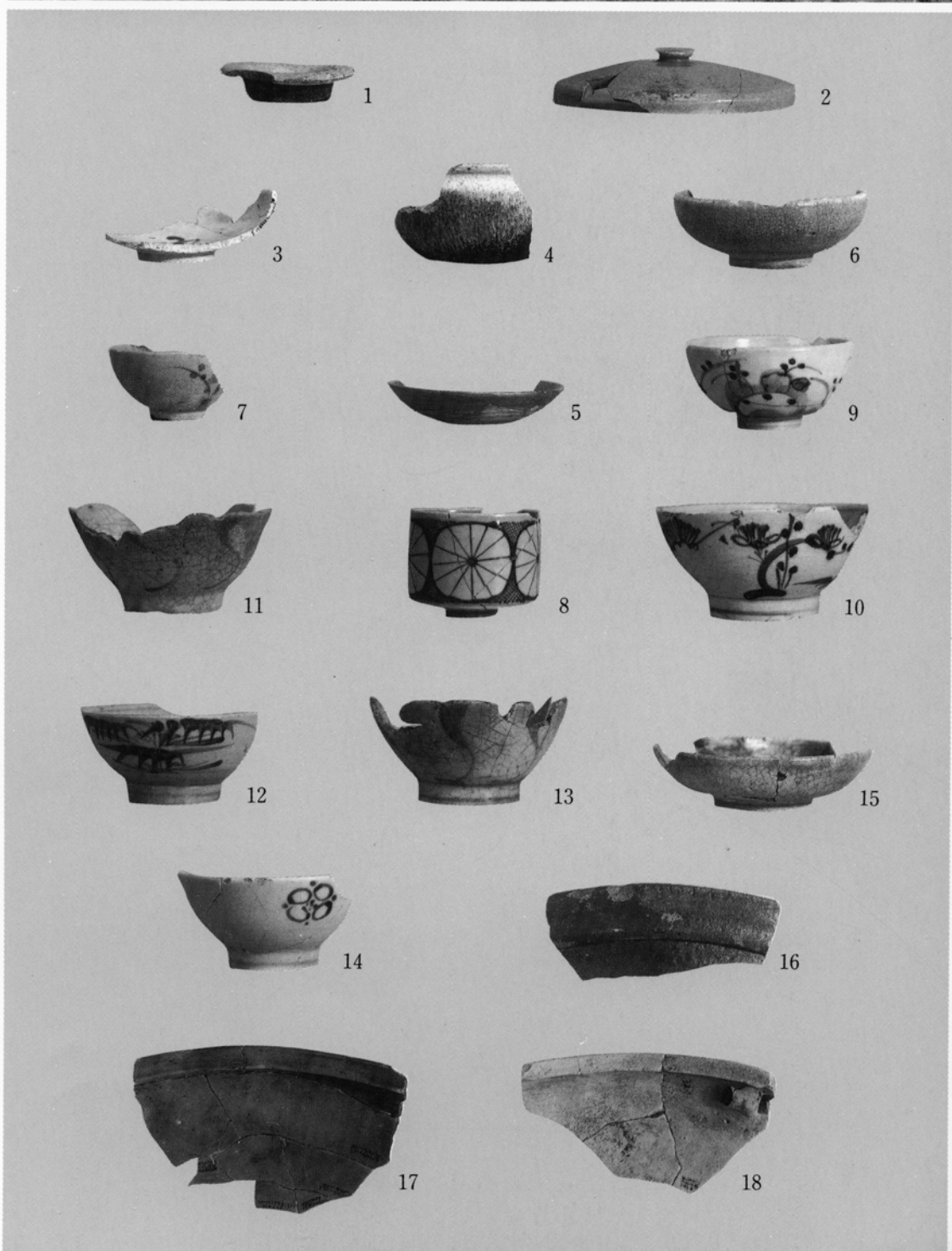
②SE 01  
(西より)



③SE 01 断面  
(東より)



①作業風景  
(東より)



②出土遺物

I		
II		
III-1		
III-2		
IV-1 a		
IV-1 b		
IV-2 a		
IV-2 b		
V		

岡島遺跡土器の変遷 各番号は、図版番号に一致する。ただし( )付番号は「県道報告」に一致する。  
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第43集「岡島遺跡II・不馬入遺跡」付図。

---

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第43集

**岡島遺跡II・不馬入遺跡**

1993年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 共同印刷株式会社

---